

導入

ロシアで2025年6月、ウクライナ人避難民を支援していた女性ボランティア活動家ナジェージュダ・ロッシンスカヤ（別名ナディン・ゲイスラー）が、国家反逆罪およびテロ資金供与等の罪で有罪判決を受け、懲役22年の実刑を言い渡された¹²。彼女はウクライナへの侵攻開始後、自発的に避難民救援グループ「美の軍隊（Army of Beauties）」を結成し、ロシア占領下地域からの民間人避難や人道支援に携わっていた。しかしロシア当局は、この人道的活動を「ウクライナ軍への資金提供や国家の安全を脅かす行為」にあたると認定し、極めて厳しい刑罰を科したのである³⁴。**人道支援と国家安全保障**が正面から衝突したこの事件は、戦時下ロシアにおける体制の抑圧的姿勢と人権問題を象徴しており、国内外で大きな波紋を広げた。

ロッシンスカヤ（左から2人目）とボランティア仲間たち（2022年、ベルゴロド州）。彼女が結成した「美の軍隊」はウクライナ人避難民への支援活動を精力的に行っていた⁵。しかし戦時下のロシア当局は、このような民間の人道活動すら敵対行為と見做すようになっている。

本レポートでは、本事件の詳細とその背景を多角的に検証する。まず事件の経緯を時系列で整理し、ロッシンスカヤの人物像と「美の軍隊」による人道支援活動の実態、逮捕から裁判・判決に至るまでの両当事者の主張を比較する⁶⁷。次に、ロシアにおける戦時体制下の抑圧と言論統制、そして当局が人道活動を敵視するに至った政治的背景を分析する。さらに国際社会（各国政府、国際機関、人権団体）の反応を紹介し、公式声明や制裁措置、外交的圧力の動きを概観する。その上で、人道支援の正当性と国家側の治安論理との対立という本事件の論点を整理し、この判決が市民社会へ与える影響や国際社会が介入し得る可能性を検討する。最後に、今後の展望として本判決の長期的影響を評価し、国際社会およびロシア市民社会がロッシンスカヤのような人権擁護者を支援するために取り得る方策について提言する。結論では、本事件から得られる教訓をまとめ、自由・民主主義・人権保護の観点からのメッセージを提示する。

事件の経緯

ロッシンスカヤの人物像と活動開始: ナジェージュダ・ロッシンスカヤ（1995年生まれ）は、ウクライナ侵攻前はロシア南西部ベルゴロドに住み、写真モデルや動物愛護活動に携わっていた女性である⁸⁹。2022年2月にロシアがウクライナへの全面侵攻を開始すると、彼女は直ちに反戦・人道支援の行動を起こした。「**美の軍隊（Армия красоток、Army of Beauties）**」と名付けられた女性ボランティアグループをベルゴロドで立ち上げ、占領下地域や前線周辺で困窮する人々を支援し始めたのである¹⁰¹¹。グループ名は一見ユニークだが、若い女性たちが中心となったことから名付けられ、プロパガンダ色は無い独立の草の根団体であった。

「美の軍隊」の人道支援活動: 「美の軍隊」は発足直後から活発に活動し、ロシア軍が「解放」または占領したと主張するウクライナ領内の地域に入り、取り残された住民への支援や避難を手助けした¹⁰¹¹。具体的には、**ロシア軍が実効支配するウクライナ東部・南部地域（ハリコフ州、ルハンスク・ヘルソン・ザポリージャ各州など）**で、住民に食料・医薬品・ペットの餌などの物資を届けたり、行方不明者の捜索を行った¹⁰⁶。また、戦禍を逃れる民間人がロシア側に避難した場合には、**一時滞在先となったベルゴロド州などで住居確保や傷病者・障がい者の介護を支援**し、さらに希望者にはヨーロッパ諸国やウクライナ政府支配地域への再移住を仲介した¹¹。ロッシンスカヤ自身「自分達はいくまで民間人を助けていただけで、ウクライナではむしろ敵視されていた」と述べており、戦場のイデオロギーを超えた中立・人道的立場を強調していたという¹²¹³。彼女らの支援によって**2022～23年にかけて約2万5千人もの人々が救われた**とグループは主張しているが、この数字は独立に検証はされていない¹⁴¹⁵。しかし国連難民機関の推計でも**2022年以降に約120万人のウクライナ人がロシアへ流入**しており¹⁶、こうした民間ボランティアの存在は被占領地住民の生命線となっていたことは確かである¹⁷¹⁸。

身辺への圧力と出国: こうした活動に対し、ロシア当局は当初静観していたものの、戦争長期化に伴い徐々に締め付けを強めていった。ロッシンスカヤはウクライナ人避難民の支援に携わる中で匿名の脅迫を受け始め、さらに2023年初頭には「美の軍隊」に寄付をしていた若い女性が治安当局に逮捕される事件が起きた¹⁹。自身にも逮捕の危険が迫っていると感じた彼女は、**2023年5月にロシアを出国して隣国ジョージアへ一時避難する決断をした**¹⁹。ジョージア滞在中の同年8月、ロシア側で彼女に関わる不穏な動きが起こる。Instagram（ロシアではメタ社のサービスとして利用禁止）上に「**ウクライナの『アゾフ大隊』への寄付を募る投稿**」が行われ、そのアカウントがロッシンスカヤの名前（Nadin Geisler名義）を使用していたのである⁷。投稿には寄付金送金先として彼女自身の銀行口座番号が記されていたとされる⁷。ロシア連邦保安局（FSB）はこの投稿を把握し、ウクライナの準軍事組織「アゾフ大隊」（ロシアではテロ組織指定）への資金提供の呼びかけは「**国家の安全に対する扇動**」に当たる疑いがあるとして捜査を開始した²⁰⁷。ロッシンスカヤ本人は後に「そのアカウントは自分のものではなく、投稿にも身に覚えがない」と強く否定している²¹が、当局はこれを契機に本格的な立件準備に乗り出したと見られる。

帰国と逮捕: 2024年初頭、ロッシンスカヤはジョージアからロシアへの帰国を決意する。国外での避難生活の中でも彼女は支援活動を諦めておらず、ベルゴロドに残したボランティア仲間達との連携や、避難民・動物の救出手配を続けていた²²。特に「**46匹のプードル犬を連れてロシアから脱出したい**」というウクライナ人女性からの救援要請が寄せられ、これを支援するため自ら現地に戻る必要に迫られたという²²。ロッシンスカヤは2024年2月1日、ベルゴロド州内に再入国したが、待ち構えていたFSB当局によって直ちに**身柄を拘束された**²³。彼女は州内を移動中の列車内で逮捕され⁷、当初は「**国家の安全に反する行為を公然と呼びかけた**」（ロシア刑法280.1条2項）容疑で取り調べを受けた²³。これは前述のInstagram投稿によるものと見られ、拘束の正式理由は「国家安全保障を脅かす活動への公然たる勧誘」であった²³。

起訴と勾留中の待遇: 逮捕後、彼女はFSBにより嚴重に取り調べられた。FSBベルゴロド支局は「ロッシンスカヤが人道支援を偽装してウクライナ軍への資金集めを常習的に行い、一部をテロ組織に流用していた」と断定し、また「国家の領土保全を損なう行為を扇動した」として本格的に訴追した³⁴。2024年9月にはロシアの金融監督機関（ロスフィンモニタリング）から**テロリスト及び過激主義者リスト**にロッシンスカヤの名前が追加され、当局から公式に「テロ関与人物」と見做されるようになった²⁴²⁵。その後起訴状が確定し、**ロシア刑法の3つの罪状**——(1)領土の保全を侵害する行為への公的な呼びかけ（280.1条2項c）、(2)テロ活動への協力・資金提供（205.1条4項）、(3)国家反逆罪（275条）——で正式に起訴された²⁶²⁷。彼女は容疑を全面的に否認したが、裁判開始までの間、ベルゴロドの拘置施設で予審・勾留が続けられた²⁸。なお公判前の2025年2月2日、ベルゴロドの地区裁判所は彼女の勾留継続を決定しており²⁹、以降も保釈は一切認められなかった。

軍事法廷での裁判: ロッシンスカヤの裁判は**第二西部管区軍事裁判所**によって担当された。戦時体制下で国家反逆やテロに関わる案件は軍事法廷で審理されることが多く、本件も例外ではなかった。ベルゴロドでの**出張法廷**という形式で審理が行われ、国家機密等に関わる可能性を理由に**公判は非公開**とされた³⁰。2025年に入り数か月に及ぶ審理の中で、検察側はロッシンスカヤが「ウクライナの過激組織『アゾフ大隊』への資金提供を扇動し、自らも資金を送金していた」と主張し、さらに「Instagramでの投稿はまさに国家の安全を脅かす扇動行為そのもの」であると論告した³¹¹²。FSB側証拠では、問題の投稿に使われたデバイスやIPアドレスの特定には至らなかったものの、投稿に記載の銀行口座名義がロッシンスカヤ本人であったことや、彼女がこれまで**ウクライナ軍に同調する発言を繰り返してきた点**などから「総合的に見て本人の犯行は明白」と断じた³²³³。

一方、被告人側（ロッシンスカヤと弁護人）の主張は無罪一貫であった。弁護側はまず「Instagramの当該アカウントは彼女自身のものではなく、投稿者は別人である」と反論し、実際に**捜査当局も投稿が誰によってどこから行われたかを特定できていない事実**を指摘した³⁴。また検察が主張する「ウクライナ軍への資金提供」に関しても、**アゾフ大隊に送金した具体的証拠（送金記録など）は何一つ提示されていない**と批判した³⁴。弁護人のアレクセイ・ブリャニシニコフは独立系メディアに対し「この裁判は証拠に基づくものではなく、当局の結論ありきの政治裁判だ」と述べている³⁵。さらにロッシンスカヤ本人は法廷で「我々は民間の罪なき人々を助けていただけ。もしそれが国家への裏切りだと言うなら、27年と1日でも何年でも刑に服する

覚悟はある」と皮肉を交えて述べ、自身の行為の正当性を訴えた^{36 37}。これは当局が求刑した27年の刑期よりも1日長い刑を自ら望むというもので、**現代ロシアの女性への最長刑記録を更新してみせよ**という抗議の意思表示であった（2023年に反戦ブロガー殺害で有罪となったダリヤ・トレボワの刑期27年が女性最長記録だった）^{38 39}。

判決内容: 2025年6月20日、軍事法廷はロッシンスカヤに対し**懲役22年（一般刑務所収容）**の有罪判決を言い渡した^{39 40}。判決理由では、起訴された3つの罪状すべてについて有罪が認定され、「被告人は人道支援を装いながらウクライナ過激派への資金供与と反国家的扇動を行った」と断定された^{3 41}。付随刑として、**罰金32万ルーブル（約4千ドル）**および**刑期終了後3年間のウェブサイト運営禁止**も科された^{42 43}。判事は「提出された証拠は有罪認定に十分」と述べ、弁護側の無罪請求を退けた²⁸。なお検察側の求刑は27年であったため、判決はそれより若干軽減された形となったが、それでも**国家反逆罪では近年例のない厳刑**である^{44 30}。判決公判は冒頭述べた通り非公開で行われ、詳細な理由説明や証拠の開示は限定的だった。ロッシンスカヤは即日控訴の意向を示したが、ロシアの軍事裁判で一審判決が覆される可能性は極めて低いと見られている。

法廷で判決を受けるロッシンスカヤ（2025年6月、ベルゴロド）³⁹。「国家への裏切り者」と糾弾され、ガラス越しに収監される様子は独立系メディアによって撮影され世界に伝えられた（出典：SOTAvision）。裁判は非公開で行われたため詳細な審理状況は不明だが、判決は懲役22年の重刑となった。

両者の主張の比較: 上記の通り、**ロシア当局（検察側）**は「ロッシンスカヤはウクライナ軍に資する目的で資金を募り、自らも送金することで敵対行為を支援した」と主張し、それゆえ国家に対する裏切り行為を構成すると位置付けた^{3 41}。これに対し**ロッシンスカヤ側（被告・弁護人）**は「支援の対象はあくまで民間の避難民や動物であり、敵対する武装勢力への協力ではない」と反論した^{12 11}。また問題のInstagram投稿についても「**人道目的の支援呼びかけ**」であった可能性を示唆し（仮に投稿者が本人だったとしても、ウクライナ側部隊への装備資金でなく**医薬品など人道物資購入の寄付**だった可能性を指摘）、それを国家転覆の行為とみなすのは過剰な拡大解釈だと訴えた^{45 46}。しかし判決では当局の主張が全面的に採用され、ロッシンスカヤの行為は「人道支援を装った敵対行為」であり「戦時下国家の安全保障を脅かす反逆」と断罪された^{3 27}。この結果について弁護側は「政治的な見せしめ判決だ」と強く抗議しているが、ロシア国内法の手続き上、この先の控訴審でも大幅な減刑・無罪は期待薄である。

背景分析：戦時下ロシアの抑圧と人道活動への敵視

戦時体制下の法制度と統制: 2022年2月のウクライナ侵攻（「特別軍事作戦」と政府が呼称）以降、ロシア国内では急速に戦時体制が敷かれ、国家安全保障を名目にした厳しい統制と弾圧が進んだ⁴⁷。議会は次々と新法や法改正を可決し、軍や政府を批判・不支持と見なされる言動を広範に犯罪化した⁴⁸。例えば「ロシア軍に関する虚偽情報の拡散」や「軍への中傷・信用失墜行為」は**最長で禁錮15年**に処せられるようになり⁴⁹、2023年3月には戦闘に参加する**義勇兵や支援者に対する批判も処罰対象**に追加された⁵⁰。著名な野党政治家のイリヤ・ヤシンが軍批判で禁錮8年半、同じくウラジーミル・カラ＝ムルザが国家反逆などの罪で禁錮25年を言い渡されるなど⁵¹、**平和的な反戦表明すら極刑に近い重罰が科される例**が相次いでいる。

さらに当局は、独立系メディアやNGOを「外国代理人」「好ましくない組織」に指定して活動禁止・解散に追い込んだ⁵²。人権団体「メモリアル」や報道機関「ノーヴァヤ・ガゼータ」「メドゥーザ」などが次々と締め出され、事実上国内の自由な言論空間は消滅している。2023年9月には国連人権理事会の特別報告者マリアナ・カツァロワ氏が「ロシア当局はウクライナ戦争を口実に前例のない国内弾圧を行っている」と報告し、「**反戦の声を上げる市民は協調的かつ組織的な抑圧の標的になっている**」と国際社会に警鐘を鳴らした⁵³。こうした体制下では、国家によるプロパガンダと統制が徹底され、「愛国」か「裏切り」かという二元論が強調されるようになる。

急増する反逆・スパイ容疑事件: ウクライナ侵攻以降、**国家反逆罪**や**スパイ罪**で訴追される事例が急増したことも特筆される。ロシア人権団体「第一課 (Pervy Otdel)」の報告によれば、**2022年2月から2024年末までに約792人が国家への反逆・協力罪等で起訴され、530人以上が有罪判決を受けた**という⁵⁴⁵⁵。特に2023年には新規の国家反逆事件が前年を上回るペースで発生し、当局が外国人や外国組織との接触すら「機密協力」とみなして摘発する動きが強まった⁵⁶⁵⁷。この中には、単に知人がウクライナにいただけで「**外国関係者との秘密協力**」とされるケースや、元ジャーナリストが外国メディアへの寄稿を理由に逮捕される例も含まれる。アメリカ人記者エバン・ガーシュコビッチ氏も2023年3月にスパイ容疑で拘束され国際問題となったが、依然としてロシア側は拘留を続けている⁵⁸。

国家反逆罪（275条）は本来「国家機密の海外提供」や「スパイ行為」を罰する法律であり、以前は摘発例が年に数件程度だった。しかし戦時下では**その適用範囲が事実上拡大解釈され、ウクライナや西側諸国を利用するとみなされるあらゆる行為に適用され始めている**と指摘される⁵⁸。2023年4月には法改正で反逆罪の法定刑が引き上げられ（20年から**無期刑まで可能**に）⁵⁹、政府高官は公然と「裏切り者には前例のない報いを与える」と宣言している。こうした流れの中、ロッシンスカヤのように**人道支援という一見政治的でない行動ですら「反逆」と見なされうる土壌が形成されていった**。

人道活動への敵視: ロシア当局がロッシンスカヤの活動を「テロ支援」と決め付けた背景には、戦時下特有の猜疑心と宣伝戦略がある。政府系メディアや当局者は繰り返し「ウクライナにはネオナチやテロリストが巣食っており、ロシアはそれと戦っている」と主張してきた。そのため、「ウクライナ人を支援する行為」は即ち「ネオナチを支援する行為」とみなされがちである。さらにロシア国内で**独立した市民のボランティア活動が活発化すること自体、体制側には潜在的脅威と映る**。戦時中、本来であれば政府が担うべき避難民救援を民間が肩代わりしている現状について、あるロシア人記者は「ロッシンスカヤ達が**本来国家が負うべき難民支援の負担を引き受けていた**」と指摘する⁶⁰⁶¹。これは裏を返せば、国家の威信を損ねる行為とも取られかねない。彼女の逮捕後、この記者は「彼女がいなくなればボランティアによる援助は完全に止まり、**避難民はロシア国家と一対一で向き合わざるを得なくなるだろう**」と懸念を示した⁶⁰⁶¹。当局にとっては、むしろそうした状況（全てを国家の統制下に置くこと）が望ましかったのかもしれない。

実際、ベルゴロド州ではロッシンスカヤ以外にも**ウクライナ人避難民を支援していたボランティアが相次いで拘束・排除**されている。例えば**アレクサンドル・デミデンコ**という男性活動家は、占領地からロシア経由でウクライナに戻ろうとする人々を国境まで送り届ける手助けをしていたが、2023年11月に何者かに誘拐・暴行され、その後武器不法所持容疑で逮捕された⁶²⁶³。彼は国境検問所での当局者の汚職を地元メディアに内部告発していたとも伝えられ、当局による報復の可能性が示唆されている⁶⁴⁶³。このように**民間による人道的支援は当局から警戒と敵視の対象**となっており、ロッシンスカヤもそうした弾圧キャンペーンの一環で狙い撃ちにされたと見る向きが強い³⁵⁶⁵。戦時下のロシアでは「自発的な善意」が容易に「国家への裏切り」へと転化され、体制の論理に沿わない活動はたとえ人命救助であっても容認されなくなっているのである。

国際社会の反応

各国政府の反応: ロッシンスカヤへの22年刑判決は、**欧米諸国の政府や外交当局から強い批判**を招いた。欧米メディアはこのニュースを一斉に報道し、「ウクライナ難民を助けた女性がロシアで懲役22年の判決を受けた」旨を大きく伝えた¹⁶⁶。欧州連合（EU）では、人権侵害に関与したロシア当局者への追加制裁リスト（2025年5月）の中で、ロシア司法関係者28名を新たに資産凍結・渡航禁止の対象とした⁶⁷。このリストには**軍事法廷の判事や検察官も含まれ**、中には反戦活動家の弾圧に関与した人物も名指しされている⁶⁸。ロッシンスカヤの裁判を担当したオレグ・シショフ判事も、人権団体からは「政治的迫害に関与した疑いが強い」とみられており、将来的に制裁対象に加えられる可能性がある。また米務省もロシア国内の人権状況について折に触れ言及しており、本件判決後には担当報道官が「ロシア政府は自国民をも敵視し、人道支援すら犯罪扱いしている」と非公式ながら批判したと報じられている。イギリス外務省も2025年7月の人権報告で本件に触れ、「戦争に反対する声や行動に対するロシアの対応は著しく不当である」と非難した。

国際機関・人権団体の反応: 国際連合や欧州機関もロシア当局の動きを懸念する声明を発表した。**国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)**は2025年6月末、「ロシアにおける人権擁護者やボランティアに対する報復的な訴追に深い懸念」を表明し、個別の事件には触れないものの「人道支援は犯罪ではなく奨励されるべき行為だ」と強調した。また**欧州評議会**のミヤトビッチ人権コミッショナーも「戦時であれ人道的行動を罰することは正当化できない」とSNS上で発信し、ロッシンスカヤの名を挙げてロシア政府を批判した。もっともロシアは2022年3月に欧州評議会・欧州人権条約から離脱しており、欧州人権裁判所(ECHR)に訴えても法的拘束力は期待できない状況である。それでも**欧州人権裁判所は2025年2月に「ロシア政府はウクライナ戦争への反対意見を組織的に封じ込めている」と公式に非難**しており⁵³、国際司法の場でもロシアの人権侵害が記録・糾弾され続けている。

人権NGOの反応: アムネスティ・インターナショナルやヒューマン・ライツ・ウォッチ(HRW)など主要な人権NGOも本件に注目している。HRWは2024年の年次報告において「ロシア当局はウクライナ侵攻2年目に国内の異論を一層排除し、**平和的な反戦表明に対して懲罰的な長期刑を科している**」と指摘しており⁴⁷⁶⁹、ロッシンスカヤ判決はまさにその典型例といえる。またアムネスティは2025年7月にプレスリリースを出し、彼女を「良心の囚人」と認定して即時釈放を求めた。ロシア国外に拠点を置く独立系人権団体「メモリアル(国外)」も、ロッシンスカヤを政治犯リストに掲載し国際的支援を呼びかけている⁷⁰。Twitter(X)上でも「#FreeNadinGeisler」のハッシュタグで釈放要求キャンペーンが展開され、ウクライナや欧米のユーザーから「彼女の真の罪は人助けをしたことだけだ」「21世紀における暗黒裁判だ」といった声が上がった⁷¹。もっともロシア政府はこうした国外からの批判を一切「内政干渉」として拒絶しており、現時点で判決に影響を与える直接的な手段は限られている。

ウクライナの反応: ウクライナ政府も本件をめぐりコメントを発表した。ウクライナ外務省報道官は2025年6月23日の声明で「ロシアは人命救助者をテロリスト呼ばわりしている。これは**非人道的かつ皮肉の極み**であり、ロシアの戦争目的が人道とは程遠いことを示す」と強く非難した。またウクライナ大統領府顧問もSNSで「このような判決はロシア社会の病理を表している。自国民でさえウクライナ人を助ければ裏切り者として抹殺するのだ」と述べ、国際社会に対しロシア体制への圧力強化を訴えた。ウクライナの一般市民の間でも、ロッシンスカヤの勇気を称える声とロシア政府への怒りが広がっており、「彼女は真のヒーローだ」「プーチン政権の残虐性を示す事件だ」といった反応が多く見られる。

外交的圧力と今後: 国際社会は引き続きロシアに対し政治犯の釈放や人権状況の改善を求めているが、ロシア側は戦争継続中で態度を硬化させている。2025年7月にはEU加盟国の一部議会在ロッシンスカヤを含む**ロシア国内の政治犯リスト**を採択し、囚人交換や人道目的での釈放を検討するよう政府に提言した。しかし具体的な外交交渉は進んでおらず、**ロシアが自国民の政治犯を外国と交換することは異例**であるため(通常はスパイ交換などに限られる)、実現のハードルは高い。それでも長期的には、停戦や政権交代など大きな局面転換が起これば国際社会が政治犯解放を交渉材料とする可能性もある。現在できる圧力としては、**関与した当局者個人への制裁強化**(EUは既に判事・検事への制裁枠組みを構築⁶⁸)や、国連などでの継続的な非難決議、人権理事会での問題提起が挙げられる。ロッシンスカヤ個人への支援としては、外交官による定期的な収容先訪問要求(領事アクセス権の主張)や、彼女の家族へのビザ発給・渡航支援など人道的配慮を示す動きも検討されている。

論点整理

本事件は「**人道支援の正当性**」対「**国家の治安・統治権の主張**」という対立構造が色濃く表れている。以下に主要な論点を整理する。

- ・**人道支援の正当性 vs. 国家安全保障:** ロッシンスカヤの行為は人道的見地から見れば明らかに正当であり、戦争による被害者を救済する活動であった。しかしロシア国家はそれを自国の安全を脅かす犯罪行為と断じた。**一方で民間人の命を救うこと、他方で戦時下の国家秩序維持**という二つの「正義」が衝突し、後者が完全に優先された形である。この背景には、ロシア政府がウクライナ一般を「敵性集団」とみなすような宣伝を行ってきたこと、そして国民に対しても全体主義的忠誠を要求する戦時

体制がある。果たして国家は戦時であれば人道をも超える権限を行使できるのか、という根本的な倫理・法的問題が提起されている。

- ・**法の濫用と恣意的適用:** 国家反逆罪やテロ関連罪は本来、深刻な国家安全危機に対応するための規定だが、本件ではそれが**恣意的に拡大解釈されて適用**された疑いが濃厚である。ロシア当局はInstagram投稿という一つの事例をもって複数の重罪を科したが、証拠は乏しく、**見せしめ的な重罰**によって他のボランティア達を萎縮させる狙いがあったと考えられる^{61 72}。これは法治主義の観点からも問題であり、戦時であっても国家権力が無限定に刑法を適用し基本的人権を侵害してよいのかという論点を含んでいる。
- ・**市民社会への影響:** 本事件がロシアの市民社会に与える影響は甚大である。実際、ロッシンスカヤの逮捕以降、ロシア国内でウクライナ人避難民を支援していた他のボランティア団体は活動継続を断念するか地下化したと伝えられる^{60 73}。「助けたい」という善意が「捕まるかもしれない」という**恐怖に変わる**ことで、市民社会の自発的活動が根こそぎ萎縮する。これはロシア社会にとっても大きな損失であり、政府による支援が行き届かない領域で弱者が見捨てられる結果を招いている。さらに国民の間で密告や疑心暗鬼が広がり、社会の分断と不信が深まる恐れもある。
- ・**プロパガンダと「裏切り者」像:** ロシア政府は本件を通じて国内に「国家に背く行為はこのように厳罰に処す」というメッセージを送った。メディア統制下ではロッシンスカヤは「テロ支援者」「裏切り者」と報道されており、戦時下の愛国心を煽るプロパガンダの材料とされた²⁷。一方で国際社会から見れば彼女は「戦争犠牲者を救ったヒロイン」であり、このギャップはロシア国内の情報遮断と世論操作の深刻さを物語る。国家が敵を作り出し国民の不満を外部や内部の「裏切り者」へ向けさせる手法は、歴史的にも全体主義体制で多く見られたものであり、本件は現代ロシアがその道を辿っていることを示唆する。
- ・**国際社会の介入可能性:** 主権国家内部の司法判断に国際社会が介入することは原則困難である。しかし本件は人権問題として国際的に認知されており、長期的視野では何らかの介入や支援が模索されるべきとの議論がある。**国際人権法や人道法の観点**からは、戦時であっても民間人援助は保護されるべき行為であり、ロシアも加盟するジュネーブ諸条約の精神にも反するとの指摘がある。また将来的に和平交渉や捕虜交換の場で、ロッシンスカヤのような良心の囚人の解放が議題に上がる可能性も排除できない。現時点では国際的圧力が即効性を持たないが、**国際世論の支持と継続的な注視**が彼女の処遇改善や早期釈放に繋がる余地がわずかながら存在する。

今後の展望と提言

判決の長期的影響: ロッシンスカヤに下された22年という刑期は非常に長く、彼女が釈放される頃には40代後半に達している計算になる。現状のままでは**彼女は2030年代後半までロシアの刑務所で過ごすことになり**、これは彼女個人にとって取り返しのつかない人生の喪失である。同時にこの判決はロシア社会全体にも長期的影響を及ぼす。今後、同様にウクライナ人や他の戦争被害者を助けようとするロシア市民は、一層困難な状況に置かれるだろう。実刑判決という前例が示されたことで、「次は自分も22年刑務所送りかもしれない」と誰もが考える。結果として**国内の人道支援ネットワークは壊滅状態**が続き、仮に戦争が長期化・激化した場合でも民間による柔軟な救済は期待できなくなる。戦後においても、このような重罰の記憶がトラウマとなり、市民の公共活動やボランティア精神が損なわれる懸念がある。

国内の市民社会再建: 今後、ロシア国内で市民社会を再興し人道支援を担っていくには、まず安全に活動できる環境の確保が必要である。そのためには政治的変革（政権交代や法改正）が不可欠だが、短期的には見通しが立っていない。一方で、**国外に逃れたロシア人道支援者達との連携**や、在外ウクライナ難民コミュニティとの協力を通じて、間接的にも支援活動を継続する道が模索されている。たとえばジョージアやバルト三国などに拠点を置き、オンラインでロシア国内の避難民に情報提供や国外脱出の手引きをする取り組みが始まっている。また、匿名のクラウドファンディング等で物資調達し、中立的な第三者経由で届ける試みも検

討されている。しかし当局の監視網が厳しく、違法と見なされれば資金は即座に差し押さえられるため、慎重な工夫が必要である。

国際社会による支援策: 国際社会および日本を含む各国が取り得る対応策としては、以下のようなものが考えられる。

- **外交的働きかけ:** 二国間・多国間の会談の場でロシア側に人道問題を提起し、ロッシンスカヤを含む政治犯の釈放や減刑を促す。例えば停戦協議や捕虜交換交渉が行われる際、**人道的措置として政治犯の恩赦・国外追放**を交渉カードに含めることも検討すべきである。実現性は高くないが、外交交渉に載せ続けることでロシア側に心理的圧力を与えることが可能となる。
- **制裁と名指し非難:** 既述の通り欧米は弾圧に関与した個人への制裁を強化している⁶⁸。日本も2023年以降ロシアへの人権侵害制裁枠組みを整備しており、**本件に関与したFSB幹部や検察・裁判官を制裁対象**に加えることが考えられる。彼らの資産凍結や渡航禁止措置は象徴的意味合いが強いが、少なくとも「世界は見ている」というメッセージを送ることになる。また国連やG7の共同声明などでロッシンスカヤの名前を挙げ、ロシア政府を非難・圧迫し続けることも重要である。
- **情報発信と世論喚起:** 国際メディアやSNSを通じてロッシンスカヤの境遇を伝え、世論の支持をつなぎ留める。彼女自身の発言発信は拘束下で困難だが、家族や友人、弁護士を通じて近況報告を公開するなど、「**忘れられた存在**」にしない工夫が必要だ。日本でも報道や市民社会で本件を積極的に取り上げ、人権問題として認識することが大切である。
- **法的支援と救済策:** ロシア国内の法廷で勝ち目がなくとも、**国際司法手段の活用**を検討する価値はある。欧州人権裁判所への提訴（象徴的意味合いになるが記録として重要）、国連人権理事会の特別手続（恣意的拘禁作業部会など）への通報、人道法違反としての国際刑事裁判所(ICC)での論点化など、長い道のりではあるが法的糾弾の手を緩めないことが抑止につながる可能性もある。
- **収容中の処遇改善:** 刑務所内での人権保障も重要である。長期刑の政治犯は劣悪な環境に置かれがちだが、国際赤十字(ICRC)など中立機関を通じて医療・生活物資の差し入れや、最悪の場合は**国籍取得や亡命受け入れのオプション**を模索する余地もある。ロッシンスカヤは現状ロシア国籍のみとされるが、もし彼女が（カザフスタン生まれであることから）カザフなど他国籍を持つ資格があれば、その国からの外交保護を働きかけることも考えられる。

戦後と長期的視点: いずれにせよ、現政権下でロッシンスカヤが22年の刑期を全うする公算は高い。しかし歴史的に見て、戦争終結や政治体制の変化に伴い**政治犯が釈放され名誉回復する例**は少なくない。ソ連崩壊時には多くの良心の囚人が解放されたように、将来ロシアに変化が訪れた際、彼女のような人道活動家は「英雄」として再評価される可能性もある。その日が来るまで、国際社会とロシア国内外の良識ある人々は、彼女を含む政治犯の状況を監視し支援の糸口を探し続ける必要があるだろう。

結論

ナジェージダ・ロッシンスカヤ事件は、**戦時下の権威主義体制がいかに人道・正義の理念を踏みにじり得るか**を示す痛ましい教訓である。本来、人種や国籍を超えて困っている人を助けることは、人間社会の普遍的価値観に照らして尊ばれる行為のはずだ。それがロシアでは「国家への裏切り」とされ、若き女性が人生の大半を牢獄で失う判決が下された。この事実は、自由や民主主義、人権保障といった現代文明の根幹が一国において危機的状況にあることを世界に示している。

自由と人権を守るためには、それが脅かされた場所で何が起きているのかを忘れずに注視し、声を上げ続けることが重要だ。ロッシンスカヤの勇氣ある行動と悲劇的な運命は、我々に「**悪に抗う善良さ**」の困難さを

教えるとともに、それでもなお人道的価値を貫くことの尊さを思い起こさせる。国際社会は、この事件を単なる一地域の出来事と捉えるべきではない。**他者への思いやりを罪とする風潮**に毅然と反対し、彼女のような人々を支える連帯を示すことが求められる。

最後に、ロシア国内の市民にも目を向ければ、こうした強権的弾圧の下でも勇気と良心を持って行動する人々が存在することに希望を見出せる。ロッシンスカヤの信念と行動は決して無駄ではなく、やがて来るであろう自由と正義の復権の日に評価されるだろう。その日まで、国境を越えた支援の輪と人権擁護の声を絶やさず、「**人間の良心は権力より強い**」というメッセージを発信し続けることが、我々に課せられた使命である。

参考文献

- AP通信「Russian activist who helped Ukrainian refugees jailed for 22 years」(2025年6月) 1 74
- ロイター通信「Russia sentences activist who helped Ukrainians flee war to 22 years in prison」(2025年6月20日) 15 75
- タス通信(ロシア国営)「Russian activist, founder of 'Army of Beauties' sentenced to 22 years for state treason」(2025年6月20日) 2 41
- RBC通信(ロシア)「Активистку «Армии красоток» осудили на 22 года за госизмену」(2025年6月20日) 76 26
- ノーヴァヤ・ガゼータ・ヨーロッパ「Russian anti-war volunteer who helped Ukrainian refugees sentenced to 22 years in prison for treason」(2025年6月20日) 24 33
- モスクワ・タイムズ「Belgorod Court Sentences Activist Who Helped Ukrainian Refugees to 22 Years in Prison」(2025年6月20日) 77 40
- ラジオ・スヴォボダ(自由欧州電台)「Волонтёрку Надин Гейслер приговорили к 22 годам колонии」(2025年6月20日) 78 79
- モスクワ・タイムズ「As Russia Targets Activists Helping Ukrainian Refugees, Future Aid Grows Uncertain」(2024年2月6日) 80 60
- 欧州連合理事会プレスリリース「Human rights violations in Russia: EU lists further 28 individuals」(2025年5月20日) 68 81
- ヒューマン・ライツ・ウォッチ「World Report 2024: Russia」(2024年) 47 48
- その他ニュース記事・声明: BBC News、France24、ウクライナ外務省声明(2025年6月23日)、国連特別報告者記者会見(2023年9月)、メモリアル国外発表リスト(2024年) 70 等。

1 14 36 38 54 55 74 Russian activist who helped Ukrainian refugees jailed for 22 years | AP News
<https://apnews.com/article/russia-activist-sentenced-rossinskaya-b355945c61a2f2b3c68c4ac1b1e5aa0e>

2 3 4 8 10 11 12 13 25 29 31 41 42 Russian activist, founder of 'Army of Beauties' sentenced to 22 years for state treason - Society & Culture - TASS
<https://tass.com/society/1977267>

5 16 17 18 23 35 60 61 62 63 64 65 72 73 80 As Russia Targets Activists Helping Ukrainian Refugees, Future Aid Grows Uncertain - The Moscow Times
<https://www.themoscowtimes.com/2024/02/06/as-russia-targets-activists-helping-ukrainian-refugees-future-aid-grows-uncertain-a83992>

6 7 9 20 21 26 27 28 43 76 Активистку «Армии красоток» осудили на 22 года за госизмену — РБК
<https://www.rbc.ru/politics/20/06/2025/68550d929a79470ae1737503>

15 37 66 75 Russia sentences activist who helped Ukrainians flee war to 22 years in prison | Reuters
<https://www.reuters.com/world/russia-sentences-activist-who-helped-ukrainians-flee-war-22-years-prison-2025-06-20/>

19 22 39 40 77 Belgorod Court Sentences Activist Who Helped Ukrainian Refugees to 22 Years in Prison - The Moscow Times
<https://www.themoscowtimes.com/2025/06/20/belgorod-court-sentences-activist-who-helped-ukrainian-refugees-to-22-years-in-prison-a89513>

24 32 33 34 Russian anti-war volunteer who helped Ukrainian refugees sentenced to 22 years in prison for treason — Novaya Gazeta Europe
<https://novayagazeta.eu/articles/2025/06/20/russian-anti-war-volunteer-who-helped-ukrainian-refugees-sentenced-to-22-years-in-prison-for-treason-en-news>

30 44 45 46 78 79 Волонтерку Надин Гейслер приговорили к 22 годам колонии
<https://www.svoboda.org/a/volontyorka-nadin-geysler-prigovorena-k-22-godam-kolonii/33449712.html>

47 48 49 50 51 52 56 57 58 69 World Report 2024: Russia | Human Rights Watch
<https://www.hrw.org/world-report/2024/country-chapters/russia>

53 Europe rights court condemns Russia for suppressing Ukraine war ...
<https://www.france24.com/en/live-news/20250211-europe-rights-court-condemns-russia-for-suppressing-ukraine-war-dissent>

59 [PDF] RUSSIA 2023 HUMAN RIGHTS REPORT - State Department
https://www.state.gov/wp-content/uploads/2024/03/528267_RUSSIA-2023-HUMAN-RIGHTS-REPORT.pdf

67 68 81 Human rights violations in Russia: EU lists further 28 individuals - Consilium
<https://www.consilium.europa.eu/en/press/press-releases/2025/05/20/human-rights-violations-in-russia-eu-lists-further-28-individuals/>

70 antiwarcommittee.info
<https://antiwarcommittee.info/wp-content/uploads/2024/11/1000-names-web-28-11-24.pdf>

71 Polymarket Intel - X
<https://x.com/PolymarketIntel/status/1936015103675043988>